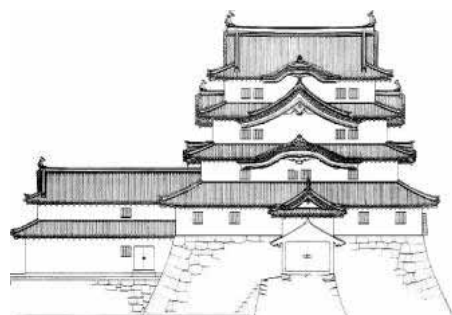


参考：地域資源の状況

【尼崎城の概要】

尼崎城の成立

元和3(1617)年、幕府は譜代大名戸田氏鉄に5万石の領地を与え、尼崎に新しく城を築くことを命じた。氏鉄は翌年から築城に取りかかり、現在の南城内・北城内の地に数年をかけて尼崎城を完成させた。この城は別名「琴浦城」とも呼ばれ、海から見ると、海の上に浮かんだように見える美しい城であったといわれている。



尼崎城は、庄下川を西の外堀とする東西300メートル程の大きさで、甲子園球場の3～4倍の規模をもつ大きな城だった。このように5万石の大名にしては大きすぎる城を幕府がつくらせたのは、尼崎城が一大名の城というだけではなく、大坂城の西を守る役割を幕府が期待していたといわれている。

尼崎城の構造

尼崎城は、本丸を中心として、時計回りに二の丸・松の丸・南浜・西三の丸と渦巻状に外側へ広がり、さらに東側には東三の丸があった。本丸には4階建ての天守閣や本丸御殿が建てられていた。この本丸御殿は、藩主の住居としての役割と、尼崎藩の政務を行う役所としての役割をあわせ持つものであった。

尼崎城のその後

戸田氏の後、青山氏・松平氏(後の桜井氏)が尼崎藩主となり、松平氏第7代藩主松平忠興のときに明治維新を迎えた。明治6(1873)年のいわゆる廃城令により尼崎城は廃止が決まり、天守閣等の建物は取り壊され、堀も徐々に埋められていった。最後まで残っていた石垣も昭和30年代には消滅し、これにより尼崎城は地上から完全に姿を消すことになった。しかし、近年の発掘調査により、地下には石垣等の尼崎城の遺構が残されていることが判明している。



尼崎城跡推定図
(出典：尼崎市教育委員会)

【旧城内中学校の概要】

建築時期	一部昭和 8 年(尼崎市立高等女学校として) 門柱は昭和 2 年	
敷地面積	17,955 m ² (うち運動場 11,098 m ²)	
建物延床面積	3F建て本校舎(5,405 m ²) 技術棟(255 m ²)	体育館(1,273 m ²) その他(181 m ²)

口の字型プラン

旧城内中学校を特徴づけているのはユニークな口の字型の平面形である。2 棟並行配置はよく見られるが、扁平な口の字型校舎は珍しい。全体として片側廊下配置とし、採光確保と教室同士の干渉緩和をはかっている。適切な部屋配置と中庭の充実により、中庭と校舎が親密につながった学校空間を形成している。

特異な校門

校舎よりも古く、昭和 2 年に講堂の新築に伴い(S40 除却)、正門を東側から北側に移築した際に建てられた。乱石積みの門柱の頂部に灯籠状の門灯を載せたかなり特異な校門である。

意匠的特徴

女学校としての配慮からか、控えめな中にも所々にモダンな装飾がなされ、落ち着いた雰囲気をつくっている。例えば、

- ・玄関ドアの両側に取りられた八角の窓(アールデコに東洋風の印象を加味したもの)
- ・玄関庇にある四角錐のガラスブロック
- ・腰壁のスクラッチタイル、床のモザイクタイル、壁・天井の漆喰
- ・階段室開口部の分節、主階段の手すり等の凝った造り など。

当初からの改変

外壁の塗り替え、講堂の建て替え、窓サッシの交換等の改変は見られるが、本体校舎の当初デザインはよく残っている。

参考：「尼崎市内の学校建築の歴史的意義とその利用上の可能性について」H13 年 11 月 足立裕司(神戸大学)
「創立二十五年史要」S14 年 3 月 尼崎市立高等女学校校友会編集



アールデコ

装飾美術の意。1910 年代から 30 年代にかけて、パリを中心に西欧で栄えた装飾様式。それ以前のアール-ヌーボーが曲線を主とするのに対し、現代都市生活に適した実用的で単純・直線的なデザインを特徴とする。1925 年様式ともいう。

【旧尼崎警察署の概要】

建築時期	大正 15 年
敷地面積	約 2,633 m ² (798 坪)
建物延床面積	約 1,756 m ² (532 坪)

経緯

明治 9 年はじめて当地に西宮警察署尼崎分署がおかれ、管轄変更等を経て、明治 15 年に伊丹警察署尼崎分署となる。大正 10 年頃から市民の間に改築の議がおこり、翌 11 年に市会決議、12 年に県会を通過し、大正 15 年 12 月（1926 年）に完成する。

意匠等の特徴

建物は鉄筋コンクリート造 3 階建て（1 階が半地下で 2 階部分が基準階であるため、地下 1 階、地上 2 階となる）正面中央部と両翼が背面に少し突き出た左右対称の平面形。当時の新聞では「表現派を加味したモダンルネサンス式」と伝えているが、「セセッション式」と呼ばれていた形式を継承していると思われる。玄関まわりの正方形の縁取りや玄関前の花鉢等にそうした雰囲気がよく表れている。

なお、平成 9 年 11 月に尼崎市都市美審議会から保存要望が出されている。

参考：「旧尼崎市市立城内児童館（旧尼崎警察署）の保存についての調査結果」H9 年 11 月尼崎市都市美審議会



モダンルネサンス

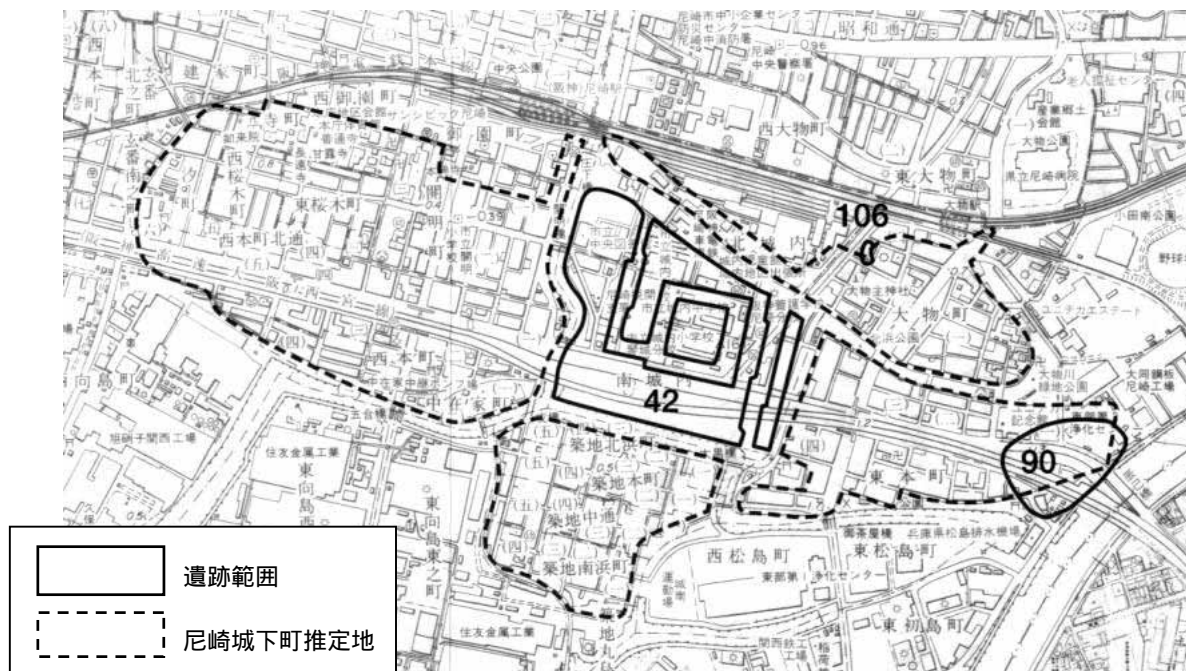
ルネサンスとは 15 世紀のイタリアで興りヨーロッパ全土に広がった、古代ローマ建築を規範とする古典主義建築で、左右対称など均衡のとれた明瞭さを特徴とする。近代的な機能主義的合理性の中に、ルネサンスの特徴を取り入れたものをモダンルネサンスと呼ぶと考えられる。

セセッション式

セセッションとは 19 世紀末、ドイツ・オーストリア各都市に興った絵画・建築・工芸の革新運動。過去の芸術様式から分離して、生活や機能と結びついた合理的で新しい造形芸術の創造をめざした。分離派とも呼ばれる。特に目立ったのは 1897 年に興ったウィーン分離派。

【埋蔵文化財、遺跡分布状況】

城内地区及び周辺では、「尼崎城跡（江戸時代）」、「辰巳橋遺跡（鎌倉～江戸時代）」、「大物遺跡（鎌倉～江戸時代）」の遺跡、及び尼崎城下町推定地が明らかになっている。



【契沖】

1640～1701年（寛永17～元禄14）僧契沖、諱（いみな）は空心。父下川元全（もとたけ）は尼崎藩青山幸成に仕えて250石扶持を給され、契沖は6男2女の第3子として尼崎に生まれる。

幼少より記憶力が抜群で、11歳で出家。大坂今里の妙法寺に入り、高野山を経て1663年（寛文3）頃、攝津国の曼陀羅院の住職となり阿闍梨位（あじゃりい）を得たが、長谷寺から室生寺に至り苦行、再び高野山に上った。後に和泉国の辻森家及び伏見家に寄寓。仏典・漢籍・悉曇（しったん）学及び和書を読破書写すること約9年にわたり、そのうち水戸光圀の依頼を受けて万葉集の注釈に心を傾け、1688年（元禄元）ころ『万葉代匠記』（初稿本）を完成したが、さらに手を加え1690年に『万葉代匠記』（精撰本）を献上した。



契沖

契沖は近世日本の生んだ鬼才であり、その学問は確乎たる文献的基礎の上に、独創的研究を行い、国学隆盛の基を築いた。国語学にも多くの著作があるが、いわゆる定家仮名遣いの誤りを正し、『和字正濫抄』を書いて、契沖仮名遣いを唱え、これは後に認められ歴史的仮名遣いとして定着した。実証主義、文献主義、合理的帰納主義という近代的方法を確立し、それまでの主観的、神がかり的、独断的古典研究を改める画期的業績を残し、その学統は荷田春満、本居宣長らに受け継がれた。大坂・高津の円殊庵にて62歳で没した。

「尼崎市地域史事典」 尼崎市立地域研究史料館編集より抜粋

■ 地域資源図



①大覚寺



②尼信記念館



③本興寺



④旧開明小学校



⑤城址公園



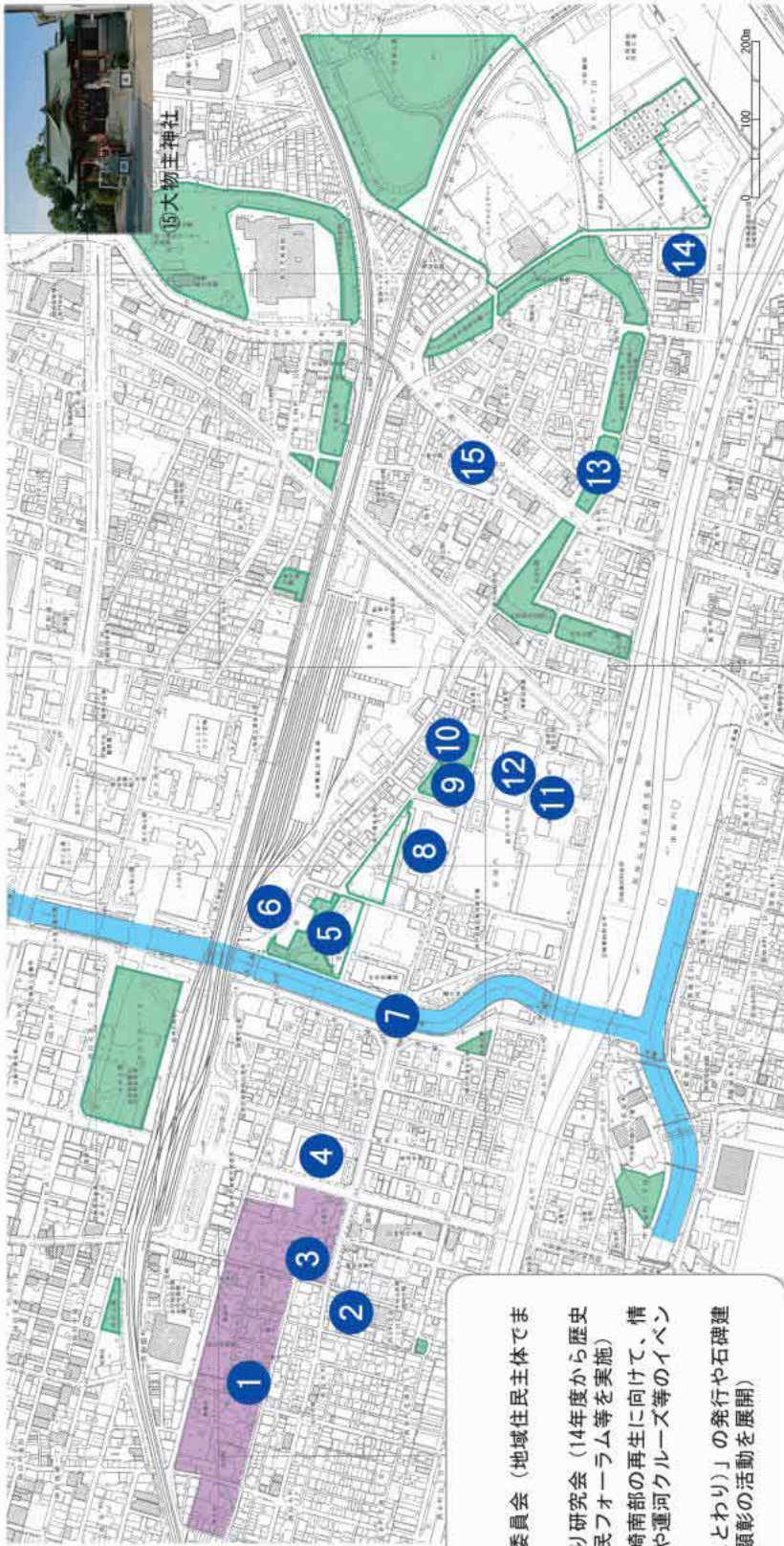
⑥阪神電鉄西倉庫
(旧阪神電鉄発電所)



⑦庄下川と開明橋



⑧城内高校
(旧尼崎市立尋常高等小学校)



【まちづくり活動の動向】

- 城内地区復興まちづくり委員会（地域住民主体でまちづくりを検討）
- あまがさき市民まちづくり研究会（14年度から歴史文化ゾーンをテーマに市民フォーラム等を実施）
- 尼崎南部再生研究室（尼崎南部の再生に向けて、情報誌「南部再生」の発行や運河クルーズ等のイベントを実施）
- 契沖研究会（会報「理（ことわり）」の発行や石碑建立、説明板設置など契沖顕彰の活動を展開）



⑨尼崎警察署
(旧城内児童館)



⑩三の丸公園



⑪明城小学校
(旧城内小学校)



⑫旧城内中学校
(旧尼崎市立高等女学校)



⑬大物川緑地



⑭ユニチ力記念館
(旧尼崎紡績本社)